

国語

入試分析

～入試ではこう出る!!～

問一 漢字の読み書き、助詞、短歌の鑑賞 配点20点

難易度は昨年よりやや下がる。出題形式に変わりなし。(ア)の読み「綻び」がやや難しいか。(ウ)の文法は格助詞の「が」が出題されたが平易。これで助動詞 1 回、助詞 6 回。(エ)は短歌の鑑賞文で、「轟くごとき夕焼けは」という表現から「聴覚的」という選択肢を選ぶ。

問二 古文 配点16点

標準的な難易度。「伊曾保物語」からの出題。本文の形式は、冒頭に「盗人」と「僧」の関係を説明する文があるものの、展開から結末を理解するものに戻った。本文には敬語の「候ふ」「侍り」「申す」「奉る」「のたまふ」などが多用され、(ウ)で反語表現が出題された。いずれも過去に良く問われている内容だった。

問三 小説文 配点24点

難易度は昨年と同じく高い。18年の明治時代や19年のパリを舞台とした、中学生が想像しにくい設定からは離れた。しかし、選択肢を消去する際に傍線部の後もヒントにする必要があり、(ア)と(エ)が難しい。3年連続で5ページの分量となり、スピードも要求される。また、16年から5年連続で「朗読方法」と「文体」に関して出題されているので、登場人物の気持ちを踏まえながら文体の特徴も意識する必要がある。

問四 評論文 配点30点

難易度は変わらない。「科学論」に関する文章だが、「有用性」「再現性」「可塑性」「営為」など抽象的な語が多く用いられ、問題では(エ)と(ク)の難易度が高い。しかし、本文が難しい場合に問題は意外と解きやすいという神奈川県傾向はそのままだった。評論文でよく扱われるテーマに慣れるとともに、抽象的な語句を地道に覚えていく努力が求められている。

問五 作文 配点10点

難易度は下がった。(ア)の資料読み取りは、割合を計算する必要がある。英語の問6や社会の資料読み取りと同様に科目横断形式となった。(イ)の記述問題は19年の30字から35字に増えたが、過去2年分の出題に比べるとまとめやすい内容だった。正解率10%程度なので苦手意識を持つかもしれないが、配点が6点と高い。国語の得意な生徒や準トップ以上を狙う子には果敢に挑戦して欲しい。

入試に向けての学習のポイント・アドバイス

国語の学習に近道はない。地道に知らない語句の意味を調べ、漢字・古文の基礎単語と文法を身につけよう。一度解いて間違えた問題は、本文中の根拠と照らし合わせて復習しよう。